

解題

詩論一卷

附録一卷

太宰純著

此書は、唐虞三代より、漢魏六朝、唐宋以下歴代の詩の沿革を敘述すと雖、著作の本旨は、明詩の唐詩と似て非なる所以を論じ、特に李于鱗を批評するを以て主眼とせり、故に明詩の徒に唐人の口吻を學び、餽釘綴緝して章を成し、宛然剪綵の花の燦爛として人目を照らすと雖、然も些の生氣なきを論じ、中に就いて李于鱗は最も此病に中れるを詳述せり。附録は、徂徠の編する所の「唐後詩」に載せたる于鱗の詩を掲げて、其の紕繆を摘發せり。著者太宰春臺の小傳は、本叢書第三卷「斥非」の解題に見ゆ。

詩論

太宰純著

夫詩何爲者也、詩出於思者也、人不能無思、既有思、則必發於言、既有言、則言之所不能盡、必不能不詠歌呻唸以舒其鬱、故古者謂之歌詩、言可歌也、揚子雲曰、言心聲也、詩者、言之條暢者也、一曰、詩志之所之也、人苟有志、詩以發之、古人燕饗賦詩、皆所以言其志也、故趙文子曰、詩以言志、此之謂也、昔在堯之時、康衢擊壤之歌、作於民間、在舜之時、慶雲之歌、作於朝廷、此等雖不載於六經、可謂歌詩之始也、元首股肱之歌、君臣相戒之詩也、五子之歌、兄弟之怨詩也、此等載於尙

夫、詩は何爲る者ぞや、詩は思に出づる者なり、人は思なきこと能はず、既に思あれば、則ち必ず言に發す、既に言あれば、則ち言の盡す能はざる所は、必らず詠歌呻唸して、以て其鬱鬱を舒べざる能はず、故に古之を歌詩と謂ふ歌ふ可きを言ふなり、揚子雲の曰く、言は心聲なり、詩は言の條暢する者なりと、一に曰く、詩は志の之く所なり、人苟も志あれば、詩以て之を發す、古人の燕饗に詩を賦するは、皆な其志を言ふ所以なり、故に趙文子曰く、詩は以て志を言ふと、此を之謂なり、昔在堯の時に、康衢擊壤の歌民間に作らる、舜の時に在りて、慶雲の歌朝廷に作る、此等は六經に載せずと雖、歌詩の始と謂ふべし、元首股肱の歌は、君臣相戒むるの詩なり、五子の歌は、兄弟の怨詩なり、此等は尙書に載せ、明らかに來世に示す、其聲調は、直に二雅と風を同うす、三百篇已に此に胚胎せり、般人の詩は未だ聞かず、唯だ商頌五篇周詩の末に附し、僅に其遺響を存すと云ふ、文王拘幽、股季に作り、箕子の麥

書明示來世其聲調直與二雅同風三百篇已胚胎於此矣殷人之詩未聞唯商頌五篇附於周詩之末僅存其遺響云文王拘幽作於殷季箕子麥秀夷齊采薇竝作於周初此等雖不列於三百篇然皆風雅之正調也至於四詩三百篇則太史采陳於前仲尼刪定於後天下之詩蔑以加焉其辭溫厚而不慢質實而不俚方正而不角的切而不刻紆餘而不回委曲而不瑣華麗而不浮儉素而不陋美而不諂刺而不隱怨而不怒愛而不私其義極乎天下之中正故古人以爲義之府是以燕飲賦之論說引之皆所以達其志也周人之詩可謂盛矣然自文武至孔子之時五百有餘年而其所刪定詩僅三百餘篇不

秀夷齊采薇は竝に周初に作る此等は三百篇に列せずと雖然れとも皆風雅の正調なり四詩三百篇に至りては則ち太史前に采陳し仲尼後に刪定す天下の詩以て加ふる蕤し其辭溫厚にして慢ならず質實にして俚ならず方正にして角ならず角的にして刻ならず紆餘にして回ならず委曲にして瑣ならず華麗にして浮ならず儉素にして陋ならず美にして諂はず刺りて隱さず怨んで怒らず愛して私せず其義天下の中正を極む故に古人以て義の府と爲せり是を以て燕飲に之を賦し論說に之を引く皆其志を達する所以なり周人の詩は盛といふべし然れども文武より孔子の時に至るまで五百有餘年而して其刪定する所の詩は僅に三百篇なり多しと謂ふべからず其作者を問へば則ち周公よりの外は家父吉甫孟子の等作る所の詩中に於て自から其名を稱す明白なると甚だし其他は序家唯だ某人の作と言ひて其姓名を詳にせず大抵王國の公卿大夫士庶人の作なり國風に至りては則ち里巷男女の詩にして諸侯夫人士大夫の作も亦これ有り序家も亦其人を詳にせざる多しと云ふ大凡古人の詩を作るは皆必ず不平の思ありて然る後に之を詠歌に發す已むと能はざる者

可謂多矣。問其作者、則自周公之外、家父吉甫、孟子之等、於所作詩中、自稱其名、明白甚矣。其他序家唯言某人作、而不詳其姓名。大抵王國公卿大夫士庶人之作也。至於國風、則多里巷男女之詩、而諸侯夫人士大夫之作、亦有之。序家亦多不詳其人。云、大凡古人作詩、皆必有不平之思、然後發之。詠歌不能已者也。否則弗作。是以古時作者不多、而一人不過終身一二作而已。其餘詩人之名無聞。此古詩之所以不多也。三百篇之外、歌詩之見於傳記者、如晉士鴛、狐裘歌、宋人于思、諷魯人狐貍、誦鶴鶴、謠鄭人子產、誦馮驩、長缺歌、齊人松柏歌、此等皆國風之餘響。特無章數耳。迨至周季、楚人屈平始作楚辭、而

詩論

なり、否らざれば、則ち作らず、是を以て古時は作者多からず、而して一人、終身一二作に過ぎざるのみ、其餘詩人の名は聞くと無し、此れ古詩の多からざる所以なり、三百篇の外に、歌詩の傳記に見はるゝもの、晉の士鴛の狐裘の歌、宋人の于思の鴛魯人の狐貍の誦、鶴鶴の謠、鄭人の子産の誦、馮驩の長缺の歌、齊人の松柏の歌の如き、此等は皆國風の餘響にして、特り章數なきのみ、周季に至るに、追んで、楚人屈平始めて楚辭を作り、而して四詩の體一變せり、其辭重複冗長にして、稍、人をして厭はしむ、後、又一變して賦と爲り、其辭は専ら夸大を極め、多言繁辭、虛語文飾、之を讀ば人をして、昏沈淫泆の心を生ぜしむ、實に文章の一大厄なり、荆軻、易水の歌、項羽、骸下の歌、漢高祖、大風の歌、戚夫人、黃鸝の歌、此等は辭たるに、短簡にして、調は風雅に近し、亦唯だ章數なきのみ、武帝の秋風の辭は、則ち楚辭の體にして、古詩の調に非ざるなり、漢人は賦に長じて、詩に短なり、郊祀、饗歌、安世が房中の歌は、皆四詩の體に異なり、唯だ韋孟の諷諫は、二雅に效ひて、少しく其體を變ず、蘇李二卿が五言の制は、風雅を一變して、後世詩家の祖と爲る、班婕妤の團扇の歌は、始めて其體に效ふ、他は多く聞かざるのみ、東漢人も亦詩を作らず、唯だ張

四詩之體一變矣、其辭重複冗長、稍使人厭、後又一變爲賦、其辭專務誇大、多言繁縟、虛語文飾、讀之使人生奢汰淫泆之心、實文章之一大厄也、荆軻易水歌、項羽垓下歌、漢高祖大風歌、戚夫人黃鶴歌、此等爲辭短簡、調近風雅、亦唯無章數而已、武帝秋風辭、則楚辭之體、非古詩之調也、漢人長於賦、短於詩、郊祀饒歌、安世房中歌、皆異於四詩之體、唯章孟諷諫、效二雅而小變其體、蘇李二卿五言之制、一變風雅、而爲後世詩家之祖、班姬團扇歌、始效其體、他不多聞耳、東漢人亦不作詩、唯張平子四愁、七言之制、始構新辭、前無古人、迨至建安中、曹孟德、子桓、子建、父子三人皆好詩、一時應劉諸子輩起、贈答唱和

平子が四愁、七言之制、始めて新辭を構ふ前に古人無し、建安中に至るに、迨んで、曹孟德、子桓、子建の父子三人は皆詩を好み、一時應劉諸子輩起して贈答唱和す、公燕從軍、人各一作あり、五言最も多く、四言之に次ぐ。

公燕從軍、人各有作、五言最多、四言次之、三代之後詩盛、是時爲始也、自是厥後、天下分而爲三國、爲南北兩朝、南朝詩盛、甚於建安中、其詩一人常數百篇、一篇常數百言、其風與世變移、自質之文、自厚之薄、自偉壯之纖媚、自宏麗之猥瑣、降至陳隋、萎爾不振、唐人始制律體、詩盛度越前代、至於以詩取士、近體之制、後世取則焉、體雖異於四詩、然風雅之致、宛然可觀矣、然一代之詩、亦有盛衰、識者取其盛者而用之、云、宋則詩衰甚、人皆學唐而不得、唐義理之學害之也、元人之詩如宋人、而時有佳焉者、極而變之漸也、明則詩盛、雖唐不及、國初卽有詩人輩出、劉伯溫、高季迪、乃其先進、鉅匠也、其後李獻吉、何仲默

三代の後に、詩の盛なるは此時を始と爲す、是より厥の後に、天下分れて三國となり、南北兩朝となる、南朝の詩の盛なるを、建安中よりも甚し、其詩一人常に數百篇、一篇は常に數百言なり、其風は世と變移し、質より文に之き、厚より薄に之き、偉壯より纖媚に之き、宏麗より猥瑣に之く、降つて陳隋に至り、萎爾として振はず、唐人始めて律體を制す、詩の盛なること前代に度越せり、詩を以て士を取るに至る、近體の制は後世取て則とせり、體は四詩に異なりと雖も、然も風雅の致は宛然として觀るべし、然して一代の詩も亦盛衰あり、識者は其盛なる者を取て之を用ふと云ふ、宋は則ち詩の衰ふること甚だし、人は皆唐を學びて唐を得ず、義理の學之を害すればなり、元人の詩は宋人の如くにして時に佳なるものあり、極りて變するの漸なり、明は則ち詩の盛なること、唐に及ばずと雖も、國初、卽詩人の輩出することあり、劉伯溫、高季迪は乃ち其先進の鉅匠なり、其後ち李獻吉、何仲默始めて復古を倡へて、文章の道大に振へり。

始倡復古文章之道大振其於詩也自古風樂府以至唐詩莫不摹擬皆至其妙迨於李于鱗王元美者出愈益研精殆無遺憾一時徐子輿吳明卿之屬爲之推轂明詩至是大振於千古可謂盛矣然余嘗觀三代之人不作詩也其有作詩者皆有思者也無思不作故孔子一生不作詩唯其去魯而歌見於家語臨河而歌見於孔叢子是一時感慨之發耳七十二子未聞有作詩者蓋無思也兩漢人亦不作詩也其有作者蘇李枚氏之屬僅僅可數耳自曹氏父子好作詩乃不待有思而作魏晉以後人多效曹氏所爲所以其詩甚多也唐人作詩之多者莫如杜子美次則白樂天是已然子美好紀時事所以有

其詩に於けるや古風樂府より以て所詩に至るまで摹擬せざるなし皆其妙に至る李于鱗王元美といふ者出づるに追んで愈益研精して殆んど遺憾なし一時徐子輿吳明卿の屬之が爲めに推轂し明詩是に至りて大に千古に振へり盛なりと謂ふべし然も余嘗て三代之人を觀るに詩を作らざるなり其詩を作る有る者は皆思ひある者なり思ひ無ければ作らず故に孔子は一生詩を作らず唯だ其魯を去て歌ひしは家語に見え河に臨みて歌ひしは孔叢子に見ゆ是れ一時感慨の發するのみ七十二子は未だ詩を作る者有るを聞かず蓋し思ひ無ければなり兩漢人も亦た詩を作らざるなり其の作る有るは蘇李枚氏の屬僅々數ふべきのみ曹氏父子の好んで詩を作りし自り乃ち思ひあるを待たずして作る魏晉以後は人多く曹氏の爲す所に效ふ其の詩甚だ多き所以なり唐人の詩を作るの多きは杜子美に如く者莫し次は則ち白樂天是れのみ然れども子美は時事を紀すること好む詩史の稱ある所以なり樂天も亦た時事を紀すること好む而も子美の雅馴に及ばず。

詩史之稱也、樂天亦好紀時事、而不及子美之雅馴、徒以常語矢口爲詩而已、雖多至千首萬首、亦何足觀哉、唯長恨琵琶二歌行較佳而已、子美雖稱詩聖、然終於此耳、一生更無他事業、則亦猶二王之終身於書、顧長康之終身於畫、不免爲曲士、何望不器之君子乎、他自李巨山、韋延休、蘇廷碩、張道濟之屬、雖富於著作、然其詩則不多、李太白、王摩詰雖有詩名、然其作不及子美之多、且唐人之詩、多漫興無題、因事而發、所以有自然之妙也、宋元則不足論、明人之詩、其多數倍唐人、且如與人贈答、唐人不過一二首、明人多至十餘首、寡亦不下數首、言盡而意不給、故多用事填塞、樵唐人成語、而綴緝以成章、其

徒に常語を以て口に矢つて詩と爲すのみ、多きこと千首萬首に至ると雖も、亦何ぞ觀るに足らんや、唯だ長恨琵琶の二歌行は較佳なるのみ、子美は詩聖と稱すと雖も、然も此に終るのみ、一生更に他の事業なし、則ち亦た猶ほ二王之終身書に於ける顧長康の終身畫に於けるがごとし、曲士たるを免れず、何ぞ不器の君子を望まんや、他、李巨山、韋延休、蘇廷碩、張道濟の屬より、著作に富むと雖も、然も其の詩は則ち多からず、李太白、王摩詰は詩名ありと雖も、然も其の作は子美の多きに及ばず、且つ唐人の詩は、多くは漫興にして題無し、事に因て發す、自然の妙ある所以なり、宋元は則ち論するに足らず、明人の詩は其の多きこと唐人に數倍す、且つ人と贈答するが如きは、唐人は一二首に過ぎず、明人は多きは十餘首に至り、寡きも數首に下らず、言盡きて意給せず、故に多く事を用ひて填塞す、唐人の成語を摭て、而して綴緝して、以て章を成す、其の巧は釘証に在り、篇章多しと雖も、復た異味なし、李鱗子は最も此の患有り。

巧在釘鮠、篇雖多、無復異味、李于鱗最有此
 惠、王元美曰、三首而外、不耐雷同、誠哉、余嘗
 謂盛唐詩、如上林宜春苑、中花異種、貴品、燦
爛照眼、中唐詩、如富人名園花、雖不及上林
宜春、亦各有奇觀、晚唐詩、如野草花、雖不足
悅目、猶有自然采色、此皆天造、不假人工也、
 明詩如剪綵之花、雖亦燦爛照眼、然無生色、
 人工所成也、此豈不然乎、凡唐詩、工拙皆
 有生色、出乎自然也、明詩則不然、強作也、夫
 周人有事賦詩者、歌三百篇詩也、未有臨事
新作者、魏晉以後之人、有事則作、異於古人
 也、古者造士進士必於學、唐以詩取士、異於
 古人也、唐人雖有事則作、猶未多作、明人則
務多作、又異於唐人也、子美雖好詩、未始擬

王元美の曰く、三首而外は雷同に耐えずと、誠なるかな、
 余嘗て謂ふ、盛唐の詩は上林宜春苑中の花の如し、異種
 貴品燦爛として眼を照す、中唐の詩は富人名園の花の如
 し、上林宜春に及ばずと雖も、亦た各奇觀あり、晚唐の
 詩は野草の花の如し、目を悦ばずに足らざると雖も猶ほ
 自然の采色あり、此れ皆天造にして人工を假らざれば
 なり、明詩は剪綵の花の如し、亦た燦爛として眼を照ら
 すと雖も、然も生色なし、人工の成す所なればなり、此れ
 豈に然らずや、凡そ唐詩は工拙皆な生色あり、自然に出
 づればなり、明詩は然らず、強いて作ればなり、夫れ周人
 事ありて詩を賦するときは三百篇の詩を歌ふ、未だ事に
 臨んで新に作る者あらず、魏晉以後の人は事あれば則ち
 作る、古人に異るなり、古は造士、進士は必ず學に於て
 す、唐は詩を以て士を取る、古人に異るなり、唐人は事あ
 れば則ち作ると雖も、猶ほ未だ多作せず、明人は則ち多
 作を務む、又た唐人に異なり、子美は詩を好むと雖も、未
 だ始めより古樂府を擬作せず、獨り子美のみならず、凡
 そ唐人多くは然り。

作古樂府、不獨子美、凡唐人多然、明人好擬作古樂府、夫古樂府、不可擬作者也、且如漢魏歌郊祀歌、其辭不可讀、其義不可曉、何以擬作爲、余惟擬作古樂府、猶畫鬼神也、其肖其不肖、誰識而辨之、假令其肖、將焉用之、又如古人歌詩及古時童謠、皆當時因事而作者也、試使其人過其時、無其事、而復作、則不能矣、而千載之下、如之何、其可擬作之乎、徒取其言之似、而摹其韻調、忽見之則肖、奈其無生色、何、于鱗擬作古樂府、以漢營新豐、而鷄犬皆識其生家、喻之、喻則似矣、然鷄犬特識其人耳、如無其人、則何有於其家哉、擬作古樂府、而無生色、與無人之室、何以異哉、余故曰、樂府古詩歌謠者、不若使古人

明人は好んで古樂府を擬作す、夫れ古樂府は擬作す可らざるものなり、且つ漢の魏歌郊祀の歌の如き、其辭讀むべからず、其の義曉るべからず、何を以て擬作するを爲さん、余は惟ふ古樂府を擬作するは猶ほ鬼神を畫くが如し、其の肖ると肖ざるとは誰か識りて之を辨せん、假令其肖たるも將た焉くに之を用ひんや、又た古人の詩を歌ひ及び古時の童謠の如き、皆な當時事に因て作る者なり、試に其人をして其時を過ぎ、其事無くして復た作らしむれば、則ち能はざるなり、而るに千載の下に、之を如何ぞ其れ之を擬作すべけんや、徒らに其言の似たるを取り、而して其韻調を摹す、忽ち之を見れば則ち肖たるも、其生色なきを奈何せん、于鱗は古樂府を擬作し、漢新豐に營して鷄犬皆な其生家を識るを以て之に喻ふ、喻は則ち似たり、然れども鷄犬特り其人を識るのみ、如し其人無くば、則ち何を其家を有とせんや、古樂府を擬作して生色なきは、人なきの室と何を以て異ならんや、余故に曰く、樂府古詩歌謠は古人をして宇宙に獨步せしむるに若かず、何ぞ心力を勞して以て之を擬せんやと、

獨歩於宇宙、何勞心力以擬之乎、凡擬作始於晉人、而盛於明、此亦明人之所以異於唐人也、夫詩者所以言志也、其本出於思、無思何作、故古人不作詩、魏晉以後人多作詩、至唐滋盛、唐尙未甚多、至明極其盛、所以詩多於前代也、夫至言不在多、如魯哀公誅孔子、僅數言耳、哀死之情溢於辭、晉宋人作誄、見於文選者、每篇數百言、讀之不見其哀、明人之作哭詩輓辭、累篇不下十餘首、否則長篇數十百韻、如元美哭于鱗排律百二十韻、冗長可厭、而無以見其哀、詩辭至是、豈不傷風雅之實哉、易所謂躁人之辭多者、其此之謂乎、夫唐人、太白、子美、皆終於詩人、明人于鱗、元美、好弄文辭、至死不倦、于鱗五十七、元美

一〇
凡そ擬作は晉人に始めて明に盛なり、此も亦た明人の唐人に異なる所以なり、夫れ詩は志を言ふ所以なり、其の本は思に出づ、思無ければ何ぞ作らん、故に古人は詩を作らず、魏晉以後は人多く詩を作る、唐に至りて滋々盛なり、唐は尙ほ未だ甚だ多からず、明に至りて其盛を極む、詩の前代より多き所以なり、夫れ至言は多きに在らず、魯の哀公の孔子を誅するが如き、僅かに數言のみ、死を哀むの情は辭に溢ち、晉、宋の人の誄を作る、文選に見えたる者は、每篇數百なり、之を讀んで其の哀しみを見ず、明人の哭詩輓辭を作る、累篇十餘首を下らず、否らざれば則ち長篇數十百韻なり、元美が于鱗を哭する排律百二十韻の如き、冗長厭ふ可し、而して以て其の哀しみを見るなし、詩辭も是に至つて豈に風雅の實を尙らざらんや、易に謂はゆる躁人の辭多しとは其れ此を之れ謂か、夫の唐人太白、子美は皆な詩人に終る、明人于鱗、元美は好んで文辭を弄し、死に至るまで倦まず、于鱗は五十七、元美は五十四なり、終身書を讀みて六經の旨を曉らず、聖人の道を知らず。

五十四終身讀書而不曉六經之旨、不知聖人之道、名爲文士耳、于鱗嘔出心肝而死、元美卒事浮屠於小祇園、而終焉、俱無功業之足稱於世、豈不可憫哉、余嘗爲此憤懣、好古君子、盍小省焉。

名づけて文士と爲すのみ、于鱗は心肝を嘔出して死し、元美は卒に浮屠に小祇園に事へて終る、俱に功業の世に稱するに足る無し、豈に憫む可からざらんや、余嘗て此が爲めに憤懣す、好古の君子、盍ぞ少しく省みざるや。

詩
論
終

日本詩話叢書

三

詩論附錄

紫 芝 主 人

余嘗謂荆軻、一刺客也、臨別而歌、其辭僅兩句、項羽、一猛將也、臨死而歌、其辭僅四句、夫此二歌者、風清調高、不爲奇語、險辭、而千載之下、生色不變、今諷詠之、可以想見當時氣象、豈不妙哉、試使後之詩人、焦心思索、七日七夜、無能得焉、是知至言不在多、多言無實、不可不戒也、昔者苑道僧喜撰善和歌、其歌二首、一曰「吾廬」、二曰「樹間」、世之所傳、唯此二首、而他無聞也、然撰歌二首、可以敵

余嘗て諷ふ荆軻は一刺客なり、別に臨んで歌ふ、其の辭は僅に兩句なり、項羽は一猛將なり、死に臨んで歌ふ、其の辭は僅に四句なり、夫れ此の二歌は風清く調高し、奇語險辭を爲さずして、千載の下に生色變ぜず、今之を諷詠すれば、以て當時の氣象を想見すべし、豈に妙ならずや、試に後の詩人をして焦心思索すること七日七夜ならしむるも、能く得ると無し、是れ至言は多きに在らず、多言は實なきを知る、戒めざる可からず、昔、苑道の僧喜撰、和歌を善くす、其の歌は二首なり、一を吾が廬と曰ひ、二を樹の間といふ、世の傳ふる所は、唯だ此の二首のみ、而して他に聞くことなし、然れども撰の歌の二首は、以て他の多作者の千首萬首に敵す可し、則ち少しと謂ふ可からざるなり、他人は徒らに多作して千首萬首

他多作者之千首萬首則不可謂少也、他人徒多作、至於千首萬首而不反撰歌、則所謂雖多亦奚以爲者也、杜子美雖稱多作、然若秋興詠懷雜詩、重篇疊章者、蓋非一日所爲也、贈答敘別遊宴賞詠歡樂悲哀之詩、一時興感之作、罕有重篇疊章者、蓋詩者歌辭也、且如與人離別、送者當酌酒而歌、送者非一人、其詩豈宜重篇疊章哉、若人皆重篇疊章、則恐歌者倦、聽者厭、是失惜別之情也、故凡一時臨事之作、尙短簡也、明人則不然、苟開口輒重篇疊章、要在闢其才、去溫柔敦厚之致遠矣、鄙哉、余少不好明詩、老而滋甚、徂來先生選明詩而

に至るも撰の歌に及ばずんば、則ち謂はゆる多しと雖も亦た奚を以てせんといふ者、杜子美は多作と稱すと雖然も秋興詠懷雜詩の若き篇を重ね章を疊む者は蓋し一日の爲す所に非らざるなり、贈答敘別遊宴賞詠歡樂悲哀の詩は、一時興感の作にして重篇疊章なる者あること罕なり、蓋詩は歌辭なり、且つ人と離別するが如き、送る者は當に酒を酌みて歌ふべし、送る者一人に非ざれば、其の詩豈に宜しく重篇疊章すべけんや、若し重篇疊章せば、則ち恐らくは歌ふ者は倦み聽く者は厭はん、是れ別を惜むの情を失するなり、故に凡そ一時事に臨むの作は短簡を尙ぶなり、明人は則ち然らず、苟も口を開けば、輒ち重篇疊章す、要は其の才を闢はすに在り、溫柔敦厚の致を去ること遠し、鄙なる哉、余少して明詩を好まず、老ひて滋々甚し、徂來先生、明詩を選んで名くるに、唐後詩を以てす、中に李于鱗の七言絶句三百首を載す、先生謂へらく、明詩は于鱗を以て至と爲す、于鱗の七言絶句は、一首として佳ならざるなしと、故に之を載すること最も多し、純は謂へらく于鱗の爲る所の唐詩は唐に非ず、而して七言絶

名以唐後詩中載李于鱗七言絕句三百首先生謂明詩以于鱗爲至于鱗七言絕句無一首不佳故載之最多純謂于鱗所爲唐詩非唐而七言絕句爲甚因而暇取唐後詩就先生所選而指摘于鱗七言絕句之瑕疵以示童蒙如左。

于鱗寄襲易曰白雲湖上白雲飛長白山中去不歸又酬殿卿曰白雲湖上華陽山又和答殿卿曰白雲湖上北風寒又襲生緋桃栽曰白雲湖上酒家春又促殿卿之宮曰白雲湖上酒家春又樓上曰白雲湖上白雲還。

于鱗言白雲湖上者六皆在起句內不換一字者二雷同甚矣白雲二字于鱗所好

句を甚だしと爲す因て暇に唐後詩を取り先生の選ぶ所に就いて于鱗が七言絶句の瑕疵を指摘して以て童蒙に示すこと左の如し。

于鱗の總易に寄するに曰く「白雲湖上に白雲飛び長白山中去つて歸らず」と又た殿卿に酬ゆるに曰く「白雲湖上の華陽山」と又た殿卿に和答するに曰く「白雲湖上に北風寒し」と又た襲生緋桃栽に曰く「白雲湖上酒家の春」と又た殿卿が宮に之くを促がすに曰く「白雲湖上酒家の春」と又た樓上に曰く「白雲湖上に白雲還る」と。

于鱗は白雲湖上と言ふ者六つ皆な起句に在り、内に一字を換へざる者二つ雷同甚だし、白雲の二字は于鱗が好んで用ふる所にして集中の諸詩に往々

用、集中諸詩、往往有之、殆乎臭腐、長白山
 中去不歸者、儼唐宋延清語、彼云蓬萊闕
 下長相憶、桐柏山頭去不歸、司馬承禎以
 道士爲天子所尊禮、在朝之人、皆善視之、
 及其辭而歸、山朝士送之、故延清言承禎
 歸後朝廷之士、將相憊不措、而道士則浩
 然歸去、不復回顧、如無情者然、故曰、桐柏
 山頭去不歸、去不歸三字、承長相憶三字、
 語乃有味、結得有力、予鱗取之、以爲承句、
 則去不歸三字、無所當、且以古人結句、爲
 承句、失造語之體、譬如斷舊偶人之足、以
 爲新偶人之手、豈成體哉。

送殿卿曰、相逢誰是眼中人、又送子輿曰、不

之れ有り、臭腐に殆し、長白山中去て歸らずは、唐の
 宋延清が語を偷むなり、彼は云ふ「蓬萊闕下長く相
 憶ふも、桐柏山頭去て歸らず」と、司馬承禎は道士を
 以て天子に尊禮せられ、在朝の人皆な善く之を視
 る、其の辭して山に歸るに及んで、朝士之を送る、故
 に延清は承禎が歸後に朝廷の士將た相ひ憶ひて措
 かざらん、而して道士は則ち浩然として歸り去りて
 復た回顧せず、無情の者の如く然るを言ふ、故に曰
 く「桐柏山頭去て歸らず」と去不歸の三字は長相憶
 の三字を承く、語乃はち味あり、結び得て力あり、予
 鱗は之を取て以て承句と爲すときは、則ち去不歸
 の三字、當る所なし、且つ古人の結句を以て承句と
 爲すは、造語の體を失す、譬へば舊偶人の足を斷ち、
 以て新偶人の手と爲すが如し、豈に體を成さんや。

殿卿を送るに曰く、相ひ逢ふ誰か是れ眼中の人と、又た

是眼中人漸少。

杜子美詩云、眼中之人我老矣、眼中猶言、

座上目前、子鱗取而用之、意不的切。

送劉戶部曰、君自扁舟似李膺、又留別吳舍人曰、君自楚人諳故事、又懷子相曰、君自平生稱國士、又和答殿卿曰、我自能憐華不注、又爲劉伯東題王母圖曰、客自金門侍從才、又寄元美曰、君自客中聽不得、又送殷正甫曰、帝自垂裳拱玉京、又送右史之京曰、身自楚臣誰不識、又挽耿蠡縣曰、知君自是神仙令、又答贈沉孟學曰、君自神仙誰不見。

子鱗用自字一法、君自最多、造語雖小異、而句法大同、又殆乎臭腐。

送吳郎中曰、草色秋迷彭蠡澤、不知何處弔、

詩論附錄

子輿を送るに曰く「是れ眼中の人漸く少なからず」と。

杜子美が詩に云ふ「眼中の人我れ老ひたり」と、眼中とは猶ほ座上目前と言ふがごとし、子鱗は取て之を用ひ、意的切ならず。

劉戶部を送るに曰く「君は自から扁舟李膺に似たり」と、又た吳舍人に留別するに曰く「君は自から楚人故事を諳んず」と、又た子相を懷ふに曰く「君は自から平生國士と稱す」と、又た殿卿に和答するに曰く「我自から能く憐む華不注」と、又た劉伯東の爲めに王母の圖に題するに曰く「客は自から金門侍從の才」と、又た元美に寄するに曰く「君は自から客中聽き得ず」と、又た殷正甫を送るに曰く「帝は自から垂裳玉京に拱す」と、又た右史の京に之くを送るに曰く「身は自から楚臣誰か識らざらん」と、又た耿蠡縣を挽するに曰く「知る君は自から是れ神仙の令」と、又た沉孟學に答贈するに曰く「君は自から神仙誰か見ざらん」と。

子鱗、自の字を用ふること一法なり、君自は最も多し、造語は小異なりと雖も、而も句法は大に同じ、又た臭腐に殆し、

吳郎中を送るに曰く「草色秋は迷ふ彭蠡澤、知らず何の

番君。

日本詩話叢書

此末句偷李太白語被云、日落長沙秋色遠、不知何處弔湘君湘君者、舜妃也、俗說舜巡狩崩于蒼梧、妃慕之自投於湘水、後人祀以爲湘靈、又號湘君、又號湘妃、卽楚辭所稱湘夫人也、凡古人之死可憫者、後人弔之、如湘妃屈原是也、故太白因遊洞庭湖、欲弔湘君也、番君者、吳芮也、芮者、秦楚之際之豪傑、歸漢而封長沙王、傳國數世、當時諸豪傑、唯吳芮爲令終、則芮之死、何弔之有、于鱗偷李語、而以番君換湘君、雖於送姓吳者的切、然事實不實、釋皎然詩式所謂三同之中、偷語最爲鈍賊者、于鱗有焉。

處にか番君を弔はんと。

一八

此の末句は李太白の語を偷む、彼れは云ふ、日は落ちて長沙秋色遠し、知らず何の處にか湘君を弔はんと、湘君とは舜の妃なり、俗説に舜は巡狩して蒼梧に加す、妃之を慕ひ自から湘水に投せり、後人祀て以て湘靈と爲し、又た湘君と號し、又た湘妃と號す、卽ち楚辭に稱する所の湘夫人なり、凡そ古人の死の憫むべき者は、後人之を弔す、湘妃屈原の如きは是なり、故に太白は洞庭湖に遊ぶに因りて湘君を弔はんと欲するなり、番君は吳芮なり、芮は秦楚の際の豪傑にして、漢に歸して長沙王に封せられ、國を傳ふること數世なり、當時の諸豪傑は唯だ吳芮終りを令くすと爲す、則ち芮の死は何の弔らふことか之れ有らん、于鱗は李の語を偷んで番君を以て湘君に換ふ、姓の吳といふ者を送るに於ては、的切なりと雖も、然も事實は當らず、釋皎然の詩式に謂はゆる三同の中に、語を偷むを最も鈍賊と爲すとは、于鱗これ有り。

席上鼓飲歌曰、風色蕭蕭易水寒。

荆軻歌云、風蕭蕭兮易水寒、蕭蕭、風聲也、于鱗用荆軻語、去兮字、而加色字、蕭蕭豈風色哉、于鱗此句、色字成癭瘤矣、古詩、白楊多悲風、蕭蕭愁殺人、蕭蕭亦風聲也、戴幼公詩、蕭蕭楓樹林、亦然。

送子相曰、江上春光好贈誰、又九日同殿卿登南山曰、砥今秋色好誰看、又東村同殿卿送子坤赴選曰、如今白壁好誰酬、又送右史曰、處處淹留好爲誰。

杜子美詩云、中天月色好誰看、于鱗傲子美用、好誰字、云春光好、秋色好則似、其云白壁好、淹留好、則不似、比之杜詩、見其不如也。

詩論附錄

席上鼓飲の歌に曰く「風色蕭々として易水寒し」と。

荆軻が歌に云ふ「風蕭々として易水寒し」と、蕭々とは風の聲なり、于鱗は荆軻の語を用ひ、兮の字を去りて色の字を加ふ、蕭々は豈に風の色ならんや、于鱗の此の句色の字癭瘤を成せり、古詩に「白楊悲風多し、蕭々として人を愁殺す」と、蕭々も亦た風の聲なり、戴幼公の詩に「蕭々たる楓樹林」と亦た然り。

子相を送るに曰く「江上の春光好けれども誰に贈らん」と、又た九日殿卿と同じく南山に登るに曰く「砥今秋色好けれども誰か看ん」、又た東村に殿卿と同じく子坤の選に赴くを送るに曰く「如今白壁好けれども誰にか酬ひん」と、又た右史を送るに曰く「處處の淹留好けれども誰か爲にせん」と。

杜子美の詩に云ふ「中天の月色好けれども誰か看ん」と、于鱗は子美の好誰の字を用ゆるに倣ひ、春光好、秋色好と云ふは則ち似たり、其の白壁好淹留好と云ふは則ち似ず、之を杜詩に比すれば、其の如かざるを見るなり。

於郡城送明卿曰漢家遷客幾人還又寄吳明卿曰古來遷客幾人還。

王子羽詩古來征戰幾人回于鱗傲之造語兩寄明卿而其末句同語相侵亦可笑矣。

寄茂秦曰誰惜虞卿老去貧平原食客一時新懷中白璧如明月何處還投按劍人。

凡絕句以寫情景勝不尙用事于鱗此詩一篇四句每句用事繁劇甚矣且白璧玉也明月珠也曰白璧如明月造語誤矣。

秋日東村偶題曰五柳青青醉裏春那能長作折腰人情知縱酒非生事昨日罷官今日貧。

此詩全似宋人。

郡城に於て明卿を送るに曰く「漢家の遷客幾人か還る」と、又た吳明卿に寄するに曰く「古來遷客幾人か還る」と。

王子羽の詩に「古來征戰幾人か回ると、于鱗之に倣ひて語を造り、兩たび明卿に寄せて、而して其の末句同語相侵す、亦た笑ふべし。

茂秦に寄るに曰く「誰か惜む虞卿老ひ去て貧し平原の食客一時新なり、懷中の白璧は明月の如し、何の處にか還て按劍の人に投ぜん」と。

凡そ絶句は情景を寫すを以て勝る、事を用ゆるを尙ばず、于鱗の此詩は一篇四句にして、毎句に事を用ゆ、繁劇甚だし、且つ白璧は玉なり、明月は珠なり、「白璧、明月の如し」と曰ふは、造語誤れり。

秋日東村の偶題に曰く「五柳青々たり醉裏の春、那ぞ能く長く折腰人と作らん、情に知る縱酒は生事に非ず、昨日官を罷むれば今日貧し」と。

此の詩は全く宋人に似たり。

和答殿卿曰、白眼風塵一酒卮、吾徒猶足傲當時。

此一二句、非唐詩之調、只是宋詩之下調、吾徒猶足傲當時、只是平常言語、非詩語也。

寄懷元美曰、誰將匹練吳門色、哭作燕山五月霜、又輓王中丞曰、白馬只今成過隙、千秋匹練曳吳門。

峽中有五味國鼎者、才子也、謂予曰、子鱗絕句非唐調、因舉此二詩三四句而曰、此似謎語、予亦不能詰。

寄元美七首、輓王中丞八首、汝寧徐使君十首、寄吳明卿十首、送殷正甫十首、送右史之京十二首。

詩論附錄

殿卿に和答するに曰く、「白眼風塵一酒卮、吾が徒猶ほ當時に傲るに足る」と。

此の一二の句は唐詩の調に非ず、只た是れ宋詩の下調なり、「吾が徒猶ほ當時に傲るに足る」とは、只た是れ平常の言語にして、詩の語に非ざるなり。

元美に寄懷するに曰く「誰か匹練吳門の色を得て、哭して燕山五月の霜と作す」と、又王中丞を輓するに曰く「白馬只今過隙を成し、千秋の匹練吳門に曳く」と。

峽中に五味國鼎といふ者あり、才子なり、予に謂て曰く、子鱗が絶句は唐調に非ずと、因つて此の二詩の三四の句を舉げて曰く、此れ謎語に似たりと、予も亦た詰る能はず。

元美に寄する七首、王中丞を輓する八首、汝寧の徐使君十首、吳明卿に寄する十首、殷正甫を送る十首、右史の京に之くを送る十二首。

此皆太多、其詩大抵多用故事、釘鉅成章、非以寫情勝者、徒鬪才而已、豈絕句本色哉、比之唐詩、見其實不如也。

戲贈張茂才曰、自愛花枝掌上紅、蛾眉如月、綰春風、須知粉黛隨時變、多恐張郎畫未工、又曰、張郎新製合歡衾、醉擁紅顏燭影深、別有洞房雙玉妾、吹簫自和白頭吟、又戲東張茂才曰、羅姑春酒百花香、潦倒張郎自不妨、爲問君家三婦豔、今朝若箇畫眉長。

張敞爲婦畫眉、本非美事、今于鱗因茂才姓張、數用是事、以爲戲、然猥褻已甚、詩曰、中華之言不可道也、趙文子曰、牀第之言、不踰闕、于鱗之言可謂踰闕矣。

送徐汝思曰、天涯明日故人疎、莫向樽前歎

此れ皆な太だ多し、其の詩は大抵多くは故事を用ひて釘鉅章を成す情を寫すを以て勝る者に非ず、徒らに才を鬪はすのみ、豈に絶句の本色ならんや、之を唐詩に比するに、其の實に如かざるを見るなり。

戲に張茂才に贈るに曰く、自から愛す花枝掌上に紅なり、蛾眉月の如く春風に綰す、須く粉黛時に隨て變ずるを知るべし、多だ恐る張郎畫く未だ工ならざるを」と又た曰く、張郎新に製す合歡の衾、醉て紅顔を擁して燭影深し、別に洞房雙玉の妾あり、簫を吹いて自から和す白頭吟と、又た戲に張茂才に束して曰く、羅姑の春酒百花香しく、潦倒たる張郎自から妨けず、爲に問ふ君家三婦の豔、今朝箇の若く畫眉長し」と。

張敞婦の爲めに眉を畫く、本と美事に非ず、今于鱗は茂才の姓張なるに因りて、數ばく、是事を用ひて以て戲と爲す、然れども猥褻已甚だし、詩に曰く中華の言は道ふ可からざるなりと、趙文子の曰く、牀第の言は闕を踰えずと、于鱗の言は闕を踰ゆと謂ふ可し。

徐汝思を送るに曰く、天涯明日故人疎なり、樽前に向つ

謫居。

此一二句以句法言之、宜爲三四句。

送子與曰、北風吹雪、雪漫漫、雪裏題詩、淚不乾。

岑參詩、雪裏題詩、淚滿衣、又云、雙袖龍鍾、淚不乾、言一身龍鍾、雙袖淚不乾也、今于鱗剛竊岑兩句、合爲一句、但云淚不乾、不言何物不乾、是不成語也、岑二詩兩句、各自成義、于鱗詩一句、乃不成義矣。

得徐使君所貽王敬美見贈答寄曰、博物張華、不易逢、十年京洛少、從容當時未、得豐城劍、已識雲間陸士龍。

此詩徒記故事耳、非絕句本色也。

前題又曰、弱冠文章滿帝城、偶因家難負平

て謫居を歎ずる莫れと。

此の一二の句、句法を以て之を言へば、宜しく三四の句と爲すべし。

子與を送るに曰く「北風雪を吹きて雪漫漫たり、雪裏詩を題して涙乾かず」と。

岑參の詩に「雪裏詩を題して淚衣に滿つ」と、又た云ふ「雙袖龍鍾として涙乾かず」と、一身龍鍾として雙袖の涙乾かざるを言ふなり、今于鱗は岑の兩句を剽竊して合して一句と爲し、但だ「涙乾かず」と言ふ、何物か乾かざるを言はず、是れ不成語なり、岑が二詩の兩句は、各自から義を成す、于鱗の詩の一句は、乃ち義を成さず。

徐使君の所より王敬美が贈らるゝを貽るを得て答寄するに曰く「博物張華逢ひ易からず、十年京洛從容、少れなり、當時未だ得ず、豐城の劍、已に識る雲間の陸士龍」と。

此の詩は徒に故事を記するのみ、絶句の本色に非ざるなり。

前題に又た曰く「弱冠文章滿帝城に滿つ、偶まゝ家難に因

生。

第二句不似詩語、只是常語。

早夏示殿卿曰、長夏園林黃鳥來、百花春酒復新開、主人把酒聽黃鳥、黃鳥一聲酒一杯。

蔡蒙齋聯珠詩格所載宋人之詩、多似此體、唐詩希有、末句聲字獨平、亦爲聲病。

送潘令之邯鄲曰、春滿邯鄲十萬家、若爲潘令闢繁華、請看如玉叢臺女、豈讓河陽縣裏花。

春滿邯鄲十萬家、句法如末句、送縣令而言女色、非諷教之正也、雖用潘氏故事、然不可訓已。

山齋牡丹曰、中有柴桑令尹家。

淵明柴桑人、爲彭澤令耳、柴桑令者、何謂

て平生に負くと。

第二句は詩の語に似ず、只だ是れ常語なり。

早夏殿卿に示すに曰く、長夏園林黃鳥來り、百花春酒復た新に開く、主人は酒を把て黃鳥を聽く、黃鳥一聲酒一杯と。

蔡蒙齋の聯珠詩格に載する所の宋人の詩は、多く此の體に似たり、唐詩には希に有り、末句の聲の字獨平なり、亦た聲病と爲す。

潘令の邯鄲に之くを送るに曰く、春は滿つ邯鄲の十萬家、若爲潘令の繁華を闢はしむるを、請ふ看よ玉の如き叢臺の女、豈に河陽縣裏の花に讓らんと。

「春は滿つ邯鄲の十萬家は、句法、末句の如し、縣令を送るに女色を言ふは諷教の正に非ざるなり、潘氏の記事を用ゆと雖も、然とも訓とす可からざるのみ。

山齋の牡丹に曰く、中に柴桑令尹の家有り」と。

淵明は柴桑の人にして、彭澤の令と爲るのみ、柴桑

也、令尹、楚官名、柴桑令尹、未聞也。

過殿卿山房詠牡丹曰、國色宮妝倚檻新一
樽堪自對殘春、卽令解語應相笑、何必看花
定主人。

此詩意義難曉、誦之亦無味。

戲問殿卿止酒狀曰、昨夜春風吹酒香、牀頭
甕甕菊脂黃、當壇笑殺如花妾、底事垂涎若
箇長。

三四句醜甚。

止酒曰、五柳先生漉酒巾、又謝兪仲蔚寄簞
亦曰、五柳先生漉酒巾。

岑參詩、世上浮名好是閑、古詩律詩皆有
此句、唐人他未見、同語重出、于鱗詩同語
重出者多。

の令とは、何の謂ひぞや、令尹は楚の官名なり、柴桑令尹とは、未だ聞かざるなり。

殿卿の山房に過ぎりて牡丹を詠するに曰く、國色の宮粧檻に倚て新なり、一樽自から殘春に對するに堪えんや、卽し語を解せしめは應に相笑ふべし、何ぞ必しも花を看るに主人を定めんと。

此の詩は意義難曉り難し、之を誦するも亦た味無し。

戲に殿卿の酒を止むる狀を問ふに曰く、昨夜春風酒を吹きて香ばし、牀頭甕々菊脂黃なり、當壇笑殺す花の如きの妾を、底事ぞ涎を垂れて箇の如く長きと。

三四の句醜甚だし。

酒を止むるに曰く、五柳先生の漉酒巾と、又た兪仲蔚の簞を寄するを謝するにも亦た曰く、五柳先生の漉酒巾と。

岑參の詩に、世上の浮名好し是れ閑なりと、古詩律詩に皆な此の句あり、唐人、他未だ同語の重出するを見ず、于鱗の詩に同語重出する者多し。

送右史之京曰、春光明日是長安、楊柳青青、
傍酒寒也、自道君爲客好、那應猶作故園看。

此起句亦如末句、三四句不可曉。

重寄伯承曰、纔說長門人便老、黃金無賦買、
春風。

陳皇后以百金買相如賦、黃金所買者賦也、非買春風也、今云黃金無賦買春風、是不成語也、安有以賦買春風哉。

答右史曰、上苑繁華此一時。

此一時者、孟子之言也、于鱗取而入絕句、恐非當行也。

早春寄吳使君曰、從他白髮病中生、濁酒寧知世上情。

此首句亦如末句、蔡希寂詩逢君賞酒因

右史の京に之くを送るに曰く「春光明日是れ長安、楊柳青青、酒に傍て寒し也、た自から君が客と爲りて好しと道ふも、那ぞ應に故園の看を作すべき」と。

此の起句も亦た末句の如し、三四の句曉るべからず。

重ねて伯承に寄するに曰く「纔に長門を説けば人便ち老の黃金賦の春風を買ふ無し」と。

陳皇后百金を以て相如の賦を買ふ、黃金の買ふ所の者は賦なり、春風を買ふに非ざるなり、今云ふ黃金賦の春風を買ふ無しと、是れ語を成さざるなり、安んぞ賦を以て春風を買ふこと有らんや。

右史に答ふるに曰く「上苑の繁華は此れも一時」と

此も一時は孟子の言なり、于鱗取て絶句に入る、恐らくは當行に非ざるなり。

早春吳使君に寄するに曰く「從他白髮病中に生ずるを、濁酒寧ぞ知らん世上の情」と。

此首句も亦た末句の如し、蔡希寂の詩に「君に逢ふ

成醉、醉後焉知世上情、于鱗取蔡結句爲
 第二句、蔡結句承第三句而言、乃有意味、
 于鱗上無所承、而以濁酒換醉後、乃無意
 味、且用此爲第二句、句法亦非其所宜也、
 簡許殿卿曰、玉函山色倚嵯峨。

嵯峨高貌、山色倚嵯峨、不知何狀、此五字
 亦不成語也。

和弄儀部明妃曲曰、天山雪後北風寒。

李君虞詩、天山雪後海風寒、于鱗偷之、以
 北字換海字而用之、亦偷語鈍賊也。

九日曰、黃花白髮病中新、壁上常懸漉酒巾、
 九日空齋似寒食、更無風雨亦愁人。

于鱗送劉戶部督餉湖廣第五首、錦帆南
 入楚雲重、江上遙看衡嶽峰、落日蒼茫秋

て酒を貰ひ因て醉を成す、醉後焉ぞ知らん世上の
 情と、于鱗は蔡が結句を取りて第二句と爲す、蔡の
 結句は第三句を承けて言ふ、乃ち意味あり、于鱗は
 上に承くる所なく、而して、濁酒を以て醉後に換ふ、
 乃ち意味無し、且つ此を用ひて第二句と爲す、句法
 も亦た其の宜しき所に非ざるなり、
 許殿卿に簡するに曰く「玉函山色嵯峨に倚る」と。

嵯峨は高き貌なり、「山色嵯峨に倚る」とは何の状な
 るを知らず、此の五字も亦た語を成さざるなり。

弄儀部か明妃の曲を和するに曰く「天色雪後北風寒し」と。

李君虞の詩に「天山雪後海風寒し」と、于鱗は之を偷
 み北の字を以て海の字に換へて之れを用ゆ、亦た
 偷語鈍賊なり。

九日に曰く「黃花白髮病中に新なり、壁上常に懸く漉酒
 巾、九日空齋寒食に似たり、更に風雨の亦た人を愁へし
 むる無し」と。

于鱗の劉戸部が餉を湖廣に督するを送る第五首に
 「錦帆、南楚雲の重に入り、江上遙に看る衡嶽峯、落日

不斷、青天七十二芙蓉、予謂于鱗絕句、唯此一首、全不用事、而氣象飄逸、造語宏麗、直可與太白右丞頡頏矣、次則九日之作、得絕句之體、勝他諸作、唯漉酒巾用陶家事、猶可厭耳、凡詩家用故事、不渾融、則成套語、套語則人皆知之、于鱗詩用套語者多、所以不及唐人也、又按于鱗有所好用字、曰風塵、曰白雲、曰白雪、曰意氣、曰文章、曰風流、曰五馬、曰五雲、曰授簡、曰褰帷、曰倦遊、曰君自、曰好誰、曰吳門、曰梁園、曰承明、曰淮陽、曰吹臺、此等于鱗用爲套語、時人以于鱗多用風塵字、呼曰李風塵、云、予謂于鱗用風塵字固多、用白雲字亦多、呼曰李白雲、亦可、王元美曰、三首而外、不耐

蒼茫として秋断えず、青天七十二の芙蓉と、予謂ふ于鱗の絶句、唯だ此の一首は、全く事を用ひずして、氣象飄逸、造語宏麗なり、直に太白右丞と頡頏すべし、次則ち九日の作も、絶句の體を得て、他の諸作に勝れり、唯だ漉酒巾は陶家の事を用ゆ、猶ほ厭ふべきのみ、凡そ詩家の故事を用ゆること渾融ならざれば、則ち套語を成す、套語は則ち人皆な之を知る、于鱗の詩は套語を用ゆる者多し、唐人に及ばざる所以なり、又た按ずるに、于鱗の好んで用ゆる處の字あり、風塵と曰ひ、白雲といひ、白雪といひ、意氣と曰ひ、文章と曰ひ、風流と曰ひ、五馬と曰ひ、五雲と曰ひ、授簡と曰ひ、褰帷と曰ひ、倦遊と曰ひ、君自と曰ひ、好誰と曰ひ、吳門と曰ひ、梁園と曰ひ、承明と曰ひ、淮陽と曰ひ、吹臺と曰ふ、此等は于鱗用ひて套語を爲す、時人は于鱗の多く風塵の字を用ゆるを以て、呼んで李風塵と曰ふと云ふ、予は謂ふ、于鱗は風塵の字を用ゆること固より多し、白雲の字を用ゆることも亦た多し、呼んで李白雲と曰はんも亦た可なり、王元美曰く、三首而外は雷同に耐へずと、虚言に非ざるなり。

雷同、非虚言也。

春興曰、自瀉金波、滿玉盤、使君沉醉不爲難、
新賦二七如花女、又向春風一笑看。

于鱗嗜酒善飲、往往見於詩中、其有止酒
之詩者、蓋病酒也、觀此詩則見其好色、嘔
血而死、宜矣哉。

右略舉于鱗絕句之巨疵、其微瑕姑不
問也、絕句如此、律詩亦可知也、律詩雖
不厭用事、然于鱗之用事、乃套語耳、故
可厭也、于鱗之詩既如此、他諸子之詩、
從可知也、嗚呼、向使徂來先生不死十
年、必見明詩之可厭、不復好之、純非敢
違先師而立異說、昏愚偶見明詩之大
異於唐詩、故也、不知世之好詩者、以爲

詩論附錄

春興に曰く、自から金波を瀉して玉盤に滿つ、使君の沉
醉難しと爲さず、新に二七の花の如くなる女を賦して、
又た春風に向つて一笑して看ると。

于鱗は酒を嗜んで善く飲む、往々にして詩中に見え
たり、其の酒を止むるの詩あるは、蓋酒を病むなり、
此詩を見て則ち其の色を好むを見る、嘔血して死
するは宜なるかな。

右は略ぼ于鱗の絶句の巨疵を舉ぐ、其の微瑕は姑
く問はざるなり、絶句にして此の如し、律詩も亦
た知るべきなり、律詩は事を用ゆるを厭はずと雖
も、然れども于鱗の事を用ゆるは乃ち套語のみ、
故に厭ふべし、于鱗の詩にして既に此の如し、他
の諸子の詩は從て知るべし、嗚呼、向に徂來先生を
して死せざると十年ならしめば、必らず明詩の厭
ふべくして復た之を好まざるを見ん、純は敢て先
師に違ひて異説を立つるに非ず、昏愚なるも、偶
ま、明詩の大に唐詩に異なるを見るが故なり、
世の詩を好む者は以て然りと爲すや否やを知ら

二九

詩論附錄 終

日本詩話叢書

然否耳。イハレヤナ

ざるのみ、